

---

浄土真宗の葬儀

---

竹中  
智秀

---



## はじめに

本書は、二〇〇五年に真宗大谷派福井教区にて行われた竹中智秀氏（前大谷専修学院院长）の講義を同教区教化委員会がまとめ『真宗と習俗を考える学習会 浄土真宗の葬儀』として出版されたものに、あらためて語句の整理等を加え、このたび東本願寺出版より発行したものです。

本書はまず、習俗化・形式化の一途をたどる「葬儀」に危機意識をもつ門徒、僧侶三名の方より問題提起をいただいた上で、竹中氏が講義を行うかたちになっていきます。枕勤め、通夜、葬儀から年忌法要まで、浄土真宗における葬送儀礼の本来の意味を一つひとつ丁寧におさえながら、深く考察された本書を、ぜひ多くの方々にお読みいただきたいと思えます。そして本書が、亡き人をご縁に本願念仏の教えに出遇う、教学・教化の最前線としての「浄土真宗の葬儀」が回復される一助となることを、心より願っています。

なお、講義当日、参加者に配布されました資料「宗門檀那請合之掟」しゅうもんだんなうけあいのおきてを巻末に掲載しておりますので、本文と併せて、学習の際などにご活用ください。

東本願寺出版

# 目次

はじめに i

## 門徒・僧侶からの問いかけ

移り行く時代の中で——門徒からの問題提起 2

現代の死生観について——住職からの問題提起 9

葬儀社との関わりの中で——僧侶からの問題提起 16

## 一 葬儀のかたち

お内仏を回復する 22

枕勤め 26

おかみそり 28

湯灌 32

納棺 35

莊嚴	37
通夜	39
葬儀	41
二 葬儀の習俗と真宗の葬儀	
火葬と土葬	46
中陰	48
念仏者の死によろ	52
路念仏	55
正信偈と和讃	57
如来の家族になる	60
同一念仏の化生	62
共同体信仰に抗して	64
「白骨の御文」を読む意味	67

三 追善の仏事と報恩の仏事

十五仏事	72
忌み事	73
精進潔斎	75
先祖崇拜	76
報恩講	77
念仏相続	80
法義相続	83

四 真宗の教学と葬送儀礼

葬送儀礼の仏事	90
同朋会運動	91
法主と門首	93
檀家制度	95
血統信仰	96
新宗憲の意義	99

六	住職の課題	132
	住職とは	132
五	一尊教と二尊教	
	質問 ①	
	一尊教と二尊教	120
	「南無阿弥陀仏」の三義	123
	教主と救主	125
	民族・国家を越えて出会う	101
	報土としての浄土	103
	実体化された浄土	104
	如来回向の真宗	108
	本願を疑う心	111
	本願を信じる信心	113
	心に浄土が開かれる	115

七 仏教は自覚教

質問 ②

仏教は自覚教

136

自利利他円満

138

菩薩の死を克服する

140

本願念仏の仏法

142

発刊によせて

大谷専修学院長 狐野秀存

143

講義時配布資料「宗門檀那請合之掟」

145

あとがき

148



## 凡例

- 一、本文中の真宗聖典とは、東本願寺出版発行の『真宗聖典』を指します。
- 一、読みやすさを考慮し、漢字は通行の字体に、仮名遣いは現代仮名遣いに改めました。



門徒・僧侶からの問いかけ

## 移り行く時代の中で——門徒からの問題提起

真宗門徒である私の日常生活の中から体験し感じたことを、いくつかお話できればと思います。

実は大変恥ずかしい話ですが、私の住んでいる地域・在所ざいしょのお葬式では、先輩の方や自分の親の年代の方々からの直接の言い伝えというか、見よう見まねで葬式をするかたちで関わってきたのですけれども、あらためて浄土真宗と葬儀というようなことを意識的に考えたり、あるいはなぜこういうことをするのだろうか、そのように思ったことが実はあまりありませんでした。

私の在所は、昭和三十年代には全体で三十軒あまりの小さい集落でした。その集落は、だいたい大谷派しゅうぎょうの同行の方が十八軒ほどありまして、それから本願寺派の方が十軒ほどおられたのです。その他は真言宗の東寺派のお寺さんが一カ寺ございまして、後の方はその真言宗のお寺の檀家です。それが昭和三十年代の私の集落の状況だったのです。

ところが、現在は約二百五十軒近くあります。昭和四十年代に民間の宅地造成がありまして、そこに新しい家が建ち、約四十軒ほど増えたわけです。

家を立てられた方の年齢を見ますと、だいたい三十代から四十代の方で、いわゆる団塊の世代といわれる方々でした。この昭和四十年代に家を立てられた方は、年齢は若いのですけれども、建てた家のほとんどに仏間ぶつまというものがありました。ですから大きな家は間口が一間ほどの大きなお内仏ないぶつが安置あんちでき

るようになっていきます。家によっていろいろですが、昭和四十年代はとにかく、家が建てられれば必ずそこに仏間というものがありません。ですから、新しく建てた家を見せてもらう時には、「仏間がどこにあるのかな、仏間はどうかというかたちになっているのかな」ということが大きな関心事であったのです。

その後、昭和五十年代に入りまして、町の人口の目標を一万人にするということで、さらに宅地造成が行われました。それに伴って急に私の集落の人口が膨れていきました。その時期が昭和五十年代から六十年代であったわけですが、この年代は、日本の経済の一番成長した時期でもありますし、またいわゆるバブルという時を経過した時期にあたります。この時期はまだ、家を建てるという時には、だいたい、半数ぐらひは仏間があったと思うのですけれども、しかしその後だんだんと、家を建てても家の中にきちんと仏間の間取りを取らないということが出てきました。

昭和が終わり平成に入って、平成五年から十年頃になりますと、町の施策として町営住宅が建ちました。この町営住宅は約三十軒近くあるのですが、そういう宗教的なものは建物の中に取り入れられないということで、仏間というものはまったくないわけです。それと合わせたように、一般の民間の住宅もだんだんと仏間のある家と仏間のない家とが逆転し、仏間のない家が増えてきました。

このことは、ここ十年ほどの間に極端にはっきりしてきました、若い世代の人の入居している家の中には仏間がありません。真宗門徒として、朝のお勤めが一日の始まりだと私たちは聞いてきました。もともと住んでいる三十軒ほどのお宅は世代間で同居していますので、そういうところには仏間があり、朝のお勤めをする。そうすると、家族が一緒に参る参らんという問題はありましたが、真宗門徒としてお

勤めが一日の始まりだということが伝わってきたということがあります。ところが、仏間がないということはお内仏を置くところがないわけですから、そういうことが伝わらないのと同時に、家の中で柱になっているお父さん方がお勤めをしない、お念仏の声が聞こえないということが具体的に出てきたわけです。

そういう方々が、この後十年、二十年経って、今の私たちの年代になった時、朝のお勤めをする、共に念仏を称とえるところは、そしてまた、聞法もんぽうするご縁をいただくということは、どこで伝統されていくのだろうかと思うのです。言い方はおかしいですけども、門徒も住職もこれは否応なしにぶつかっていく問題だと思います。

従来の教化事業、教化の方法については、いろいろあると思うのですが、たとえばお手次ぎのお寺に行って、法話を聞かせていただき、わからなければまたご住職あるいは坊守ぼうちうさんに、この間お聞きしたことはどういうことだったのでしょうかとお尋ねすることはできるわけですけども、だんだんとそういうことがなくなっているというように感じます。

今までのように、お寺にお参りして、ぜひ、法話を聞いてくださいという、それだけの教化のありかたでいいのかどうかというような疑問を感じています。

それから、もうひとつ具体的に、たとえば私の在所で、通夜から始まって納骨まで、お亡くなりになった方をどのようなかたちで送られているかについてもふれてみたいと思います。

まず、私の在所では、亡くなられた方が出ますと、ご住職に枕経をあげていただいて、その後、在所

の者で通夜の準備をするのですが、昭和三十年、四十年代の頃は、お西の方が亡くなった時にはお西の方の同行どうぎょうの講付き合いの關係の人たちでお手伝いをして、お葬式の準備をするわけです。それから、お東の方が亡くなられた時には、お東の方の同行を中心に、いろいろな付き合いのある人たちでお手伝いをして、葬式を出していくとかたちだったわけです。

そのことが今申し上げたように、ここ三、四十年の間に急に在所の戸数が二百軒ほど増えましたので、新しくこの集落の中に入ってこられた方が多くなりました。入ってきた時は三十代、四十代ですから、お葬式を出すということがなかったわけです。けれども、最近になると、その方々が六十歳前後になってきて、定年退職して家にいます。そして、体の弱い方々がぼつと亡くなっていくという状態になってきているわけです。そうすると、私たちのように、ずっとそこに住んでいた、生まれ育った者と違って、しきたりのものをまったく知らないわけです。

これまではお通夜をする時、まず私たち同行の者が調声ちようしやうをしてお通夜の勤行ごんぎやうをするわけですが、その方たちはそういう繋がりがありませんから、否応なしにお寺の住職にお願いをするというようなかたちでお通夜が勤まっています。

お葬式のかたちはどこもあまり変わらないと思うのですけれども、私の在所では、お葬式の斎壇も含めて全部お手伝いの人が準備していたものです。けれども、十年から十五年ほど前から、葬儀社が入ってきました、斎壇から何からいろいろと準備をしてくれるようになりました。その段階になってくると、在所の人や同行の人が調声するというよりも、葬儀社を通じてお寺さんをお願いするというようなかた

ちが出てきました。今までは、お互いにお手伝いをし合って、協力をし合ってお葬式をみんなまで出していく、そして、その中に悲しみを共有するとか、そういうようなことがあったのでしょうか。けれども葬儀社の会場を使って、葬儀社にお葬式の準備を全部まかせてしまうと、そういう悲しみを共有する時間的なものがないように思います。

それを一番端的に感じますのは、昭和三十年代頃までは、体の具合が悪い方、あるいはお年寄りの方の多くを家で看護をしていましたので、臨終が近づいてきた場合には、家族の方なり近親者の方が家で息を引き取るのを看取っていく。そして、家の中で湯灌ゆかんをして、それから斎壇にお移しするというようなかたちだったわけです。そのように、家の中で湯灌までしていきますと、否応なしに、子どもたち、孫たちがその姿を目の前で見っていくわけです。

死ということを目のあたりにして、葬式が進んでいくわけですけれども、最近は病院で亡くなられる方が多いのです。そうすると、病院で亡くなっても、一度亡骸なきがらを家に引き取って、湯灌される方もあるのですけれども、病院で納棺してしまう場合が多いのです。そして、病院の霊安所からそのまま葬儀社の斎壇に棺をもっていってしまうということがあります。

すると、小さい子どもたちは、おじいちゃんが息を引き取る時に顔を合わせることもない。結局、悲しむということも自然に体験しないわけです。

悲しむという感覚が薄いというか、死ということに対して、それを事実として受け止めることができず、そういう現実があるのではないかと思えます。幼稚園ぐらいの小さい子どもですと、葬式とい



ましても、綺麗に花で飾ってあって、親類の人がたくさん寄ってきて、何か知らないけれども、もうお祭り騒ぎで、ワアッと、綺麗なところで何かやっているという感じでしょう。死ということが小さい子どもの時からみんな切られてしまって、そういうものを肌で感じることを教えていない。そういうことが今、私たちの間に起きているのではないかと、そんなことを思っています。

もう一つは、そういう一連の葬式等で、私たちは、りやくかたぎぬ略肩衣を着けるように親から言われております。しかし、五年ほど前から葬儀社の会場にお参りされる人の様子を見ておきますと、皆さん、あまり肩衣を着けていない。ほとんど、黒い服に黒いネクタイを締めているわけです。十年ほど前ならば、少なくとも半分近くの方は略肩衣をきちんと着けてお参りされていたように思うのですけれども、最近見えますと、特に若い世代の人は、もうほとんど肩衣を着けていません。私も息子にお参りさせる時に、ちゃんと肩衣をもっていきなさいよということを言わなければ、もっていきこうとしません。

だから、そのようなことでも、親から伝わってきた、真宗門徒として伝統されたものが消えていくという、そういう傾向にあるのではないかと、そのように思っています。

そういうことを通しまして、私自身がよく理解できていないいくつかの問題をお話させていただきたいと思います。

まず一点目は、皆さんもよくご承知のように、どうぼうかいどうどう同朋会運動は宗門のいのちだと位置づけられており、そのために、いろんな施策がとられております。ところが実際、そうした同朋会運動が生活の場で、今申しましたような生活の中のかたちとして、真宗門徒であるということがきちんと伝わっているのか。私

たちも、門徒としてそういうことを心がけているのだろうかという疑問があります。

よく言われることは、お通夜の勤行がありました後にあげられる蓮如上人の「白骨の御文」は、宗旨を問わず、皆さんが頷いて聞いていただけるわけです。ところが、そういう大切な法話を聞いてもらえる絶好のチャンスなのに、そういう時間というのがまったく言っていないほど活かされていないのではないかと思います。

また、私のところでは葬式の後に、茶毘に付したお骨をお寺に納骨に行くわけですが、お通夜にしても、そうして納骨に行くにしても、そこには家族の方だけではなくて、いろんな方たちが一緒にお参りをしておられるわけです。それこそ、宗門内だけでなく、宗門外の方にも真宗の教えを聞いていただく最高の場所であろうと思うのです。そういう場所が聞法の場所として活かされているのだろうかということを思います。

それから、習俗というか、習慣というか、私のところでは出棺の時に、喪主の方は白装束になって肩衣をつけ、藁草履を履くようにと言われています。今もそれが守られているのです。なぜ藁草履なのかも気になるのですが、その藁草履を齋場に行った時に、それを処理してもらい、帰りには普通の履物と履き替えて帰るのです。

それと、同時に齋場に身近な人が同行されますと、マイクロバスなどを使って送迎をするわけですが、そのマイクロバスが齋場に行く時の道順と、帰る時の道順とが全然違う道順を通して帰るのです。これもなぜそういうことがいまだに行われているのか。そんなことも教えていただけたらと思っています。

それから、焼香についても、お通夜の場所で皆さんの動きを見ておきますと、ほんとうにいろいろです。以前、ある住職に真宗の焼香の作法はこうですよ、ということをお教えたのですが、真宗門徒の私たちがそういうことについても、きちんと知っているのかなと思います。肩衣につきましても、若い人から、なぜ肩衣を着けなければいけないのかと問われた時、きちんと私たちは答えられなければ若い人は納得しないわけです。

最後に、私の在所では、お亡くなりになった日を含めて、いわゆる四十九日の忌明けの法事があるわけですが、三月みつきにまたがるといけないということを、特に女性の方はこだわるわけです。なぜかと私が聞くと、「昔からそうなんだ」というような答えしか返ってきません。それで、それは間違いだということは指摘できるのですが、なぜ間違いなのかということについては、きちんと話ができないという現実が私にはあります。

以上、いくつかの私の知らないことを含めまして、私の感じたことを申し上げます。

### 現代の死生観について——住職からの問題提起

去年の三月に、前任職の父親を見送りました。前日まで非常に元気でしたが、翌朝の五時に倒れまして、駆けつけた時にはまだ温かかったことを覚えています。九十一歳でしたから、私も覚悟はしておりましたけれども、前日、会話もし食事も取っており、こんなに急に倒れるとは思っていませんでした。そ

ういうこともあってちょっと慌てまして、脈を取るなり、額に手を当てるなりしてみると温かいのですが、全然動かないので急遽、かかりつけの病院の先生に来ていただきました。そして、午前六時に「御臨終です」と、先生から父の死が告げられました。その後、お葬式、満中陰まんちゆういんのご法事と、いろいろありました。そのようなことから今回、お話をするご縁をいただいた次第です。

私は昭和六十年から二十年間、福井のお寺で住職をしております。二足の草鞋わらじといいますが、住職をしながら教育の現場にも勤めています。学校の生徒は時々、「どっちが本職や」と、厳しいことを言いますが、「どっちも本職や」とこう言わざるを得ないし、そういう気持ちでないと勤まらないような、そういう生活でございました。そういう中で、お葬式を勤めながら、「これでいいのか」と、具体的な疑問をもちながらずっときておりました。

しかし、いろんなことを抱えている中で、私たち住職がお葬式を勤め、あるいはお通夜のお話をし、あるいは亡き人を見送っていくことが、私たち浄土真宗の教えの中に生きる者の勤めではないかと思っています。

私たち現代人は死というものを避けて、世を挙げて健康至上主義になっています。テレビの番組や本屋さんの店先も、とにかく元気で長生きと、私たちの人生の目標が元気で長生きすることだというようなことがあふれています。そこで思われるのが、私たちの死生観が間違っていますと、お葬式そのものが当然、見当外れになっていくということです。

私は福井のお寺で住職をしておりますが、三町合同の追弔会ついでかいをローテーションで行っていきまして、去

年はちょうど私の寺で執り行いました。その追弔会には、六、七十人が皆参詣してくるのですけれども、お勤めが済みまして、高齢者学級の会長の挨拶がありました。その内容が、今の「元気で長生き」です。ひと言で言いますと、今日ここへ集められた方々は、見た通りお元気だ。来年の追弔会も元気でまたお会いしましょう」ということでした。追弔会に集まった人々が、追弔、すなわち、亡くなった人々への追慕の気持ちはどっかへ吹っ飛んでしまって、来年また元気で会いましょうという、まるで何かクラス会や同窓会などの集まりのような挨拶をなさるのです。

こういう光景を見る中で、ああ、やっぱり私たちは、もう世の中挙げてとにかく、元気で長生きするということが人生の最高の目標だという方向へ進んでいると実感しました。そして実はそこに、大きな危惧といえますか、不安があるのではないかと思いました。それは死というものを、自分の近くから、なるべく敬遠して遠いところへ退けて、そして毎日毎日ルンルン気分で生きていけることを喜ぼうということです。

しかし、いずれ「生老病死」の問題にぶつかります。今生きている自分自身の目の前に、すなわち生の目の前に老病死という間近に迫った問題が必ずくる。元気で、長生きできないという、そういう事実にも必ずや私たちは出くわしていかなければならないという、そういう自己矛盾の中にいるわけです。それにもかかわらず、私たちはいろんなかたちでそういう健康至上主義に流されています。

大事なものは、亡くなっていった方と生き残った私たちの間に、いよいよそこから対話が始まっていく、いわゆるコミュニケーションがそこから始まっていくことではないでしょうか。しかもそれは自分の力

で対話できるのではない。亡くなった仏のほうから、えこ回向されてくるということです。

私たちが、人間業を尽くして亡くなっていかれた方々の死、そしてお葬式、そしていろんな仏事を通じて、常に頭の中に置いておかなければならないのは、やはり亡くなっていった人からのメッセージを聞くということだろうと思います。それがないと、私たちは、お葬式によってぷっつり切れていくようなかたちで、死がどこか遠く、おぼろ気な思い出としか残っていかないのではないかと思うのです。

先般、ある新聞社の社長だった方のお葬式がありました。非常に大きな葬式だったようです。通夜には三千名の参詣とありました。それから、会葬が二千五百名だったということです。そのお葬式の弔辞ですけれども、一番最後は例の「安らかにお眠りください」でした。

私は、心情的にわからなくはないのです。あまりにも苦勞なさった方に、楽に休んでくださいという気持ち、人間の心情としてはわからなくはないけれども、やはり亡き人に眠ってもらったら困る。やはり仏さんになって、私たち生き残っている人間にいろんな声を発信してほしいというのが、私たちの生き残った人間の本心でしょう。またそれが、私たちの亡き人への、本当の供養ではないかと思えます。その葬式で一通だけ、社長さんは立派な、いろんな文化活動、芸術活動をなさっていた方でしたので、後を受け継いで自分たちががんばるから、どうか見守ってください。こういう、死を無駄にしないという弔辞が、一通だけありましたが、後はみんな死者というものを、敬遠というか、遠くへ遠ざけるような弔辞で終わっております。問題は、死というものに対する私たちの履き違いです。

それからもうひとつ、平成十六年に、NHKが放送した「21世紀 日本の課題 子どもが見えない」(第

二回〉大人はどう向き合うのか」という特別番組がありました。その中で、小学校の授業風景が映し出され、そこで先生が子どもたちに「人間は死んで、再び生き返ってくると思いますか」と質問をする場面がありました。そうしますと、驚いたことに子どもたちの四割ほどが、「必ず生き返ってくる」と言っていたのです。四割近くの子もたちが、人間は死んだら再び生き返ってくると、真剣にそう思っているということならば、これはもう簡単に人を殺めても、殺めた子ども自身の中に納得できてしまうものがあるのではないかと思うのです。大人は大人で、死を遠くへ追いやり、子どもは子どもでそうやって死というのを再び蘇生そせいしてくるというような、そういう考えをもっているのです。

それで、私が聞き覚えております三つの言葉を紹介させていただきます。

まず死について、北海道の寺院の坊守さんで、若くして癌で亡くなられた鈴木章子すずきあやこさんのこういう言葉です。

畳の上で死ねなくても、それは私の御縁です。そして、息が切れたその時には、ただいまっと、私を押し出してくれた、はたらきの中に帰っていきます。私は、こう、私を生き切ってきましたと帰ります。そうして、帰ったあかつきには、私がそうであったように、私の縁につながる子孫たちにあなたも、しっかり生きてと願うものになりましょう。私を、この世に押し出してくれたはたらきを、ナムアミダブツと申すならば、私は、ナムアミダブツから生まれてきました。そして今、ナムアミダブツに照らされて、煩惱具足のこの身を生きております。この世の生が終わったら、また、ナ

ムアミダブツに帰り、ナムアミダブツとなって生き続けます。これが私の生であり、死であります。もう一つは、死というものについて、東京大学の小児科医の阿部知子あべともこさんが、どの本か忘れましたが、「死を看取る文化」という文章の中で書かれていた言葉だったと記憶しています。この先生は一年に二十人ほど、まだ十歳にも満たない年齢で死んでいく子どもたちを見送っておられる方です。

子供たちは、その死の瞬間まで、親の手の中で看取られたいと望んでいます。それが一番寂しいからです。また、最後のお別れができるからです。その、最後のお別れは、臨終を告げられた時に子供たちの目から出る一筋の涙であると、私はいつも思います。お父さんお母さん、さよなら、ありがとう。そんなふうに思わせる子供たちの死を私はたくさん看取ってきました。臓器移植を待つて亡くなっていく子供たちも、自分の命のろうそくを体で知っています。消えていこうとする命の最後を、ただ一緒に、そばに居てくれることで、燃やし尽くすこと以外、その苦しさを死の恐怖から自由になることができません。移植によって助かることだけでなく、死を一緒に分け合ってほしいのです。親は助かる道に望みを託し、子は死を受け入れる。そのすれ違いは悲しすぎます。命はその送られ方で姿を変えるのです。

そして最後に、これは、山形大学の松尾剛次けんじ先生が「親鸞と中世都市鎌倉」という文章の中で、真宗



の葬儀について注文をつけていらっしやいます。

「葬式仏教」と言えば仏教者の一番墮落した姿と捉えられてきましたね。しかし、本来葬送というのは、人間の死というきわめて厳肅な事柄を扱う重要な儀式です。(中略)現代の僕らでも、死体がバラバラにされて捨てられるといった事件があると、きわめて陰惨いんさんなイメージを持ちますね。それは昔の人も同じで、自分や家族の死体はちゃんとした形で葬ってほしい。これは人間の文化の根本にある根源的な欲求だと思えます。そうした欲求に対して、鎌倉仏教の教団は死穢しえの禁忌きんきを乗り越えて取り組んでいった。そのことの歴史的な意義を、僧侶の方もっと真剣に自覚されるべきではないかと思えます。

これら三つの言葉から思えますのは、死というものを生との円環の中で考えていかなければならないということ。私たちがまるで生と死を両極のように、十と一のように、毛嫌いして死を考えていくと、必ず私たちが非常に寂しい一生というものを送らなければならなくなるのではないかと思えます。以上、私の問題提起とさせていただきますと思います。